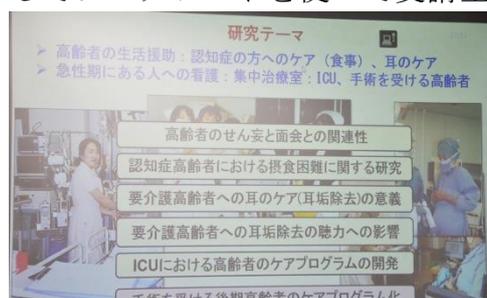


# 平成29年度第8回理系チャレンジ講座を実施しました

今年度の最終となる第8回理系チャレンジ講座が、平成30年2月21日、本学医学部の末弘理恵先生により、「急性期看護」と題して行われました。

遠隔配信された大分鶴崎、中津南、国東、三重総合、臼杵、大分西の6校74名の高校生が受講しました。

始めに学習目標として「急性期にある人の状態を知り、その人への看護の方向性を知ること」、「講義を通して、『看護学』、『大学で学ぶこと』について、興味・関心を持つこと」の2つを確認しました。そしてワークシートを使って受講生が思い思いのキーワードを挙げながら「急性期にある人」

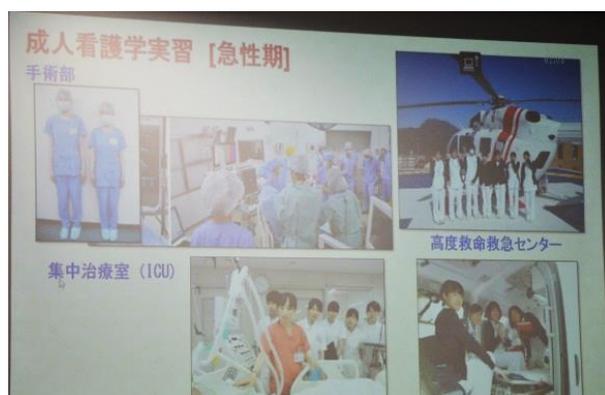


のイメージマップを作成した後は、高度救命救急センターや手術室、ICUの様子などの画像を使って成人看護学の実習（急性期）が紹介されました。

次に、急性期にある人、急性期にある人への看護について考えるヒントとして、専門看護師北村愛子さんの仕事の様子を動画で視聴しました。視聴後、末弘先生は北村さんの行動の中で、実際に自分の目で見て患者さんの身体の状態を確認しているところ、いつも患者さんの手を握ってコミュニケーションを図りながら状態を見ているところが重要なポイントであることを確認されました。

健康レベルとその看護内容の紹介では、急性期看護とクリティカルケア看護、救急看護、周手術期看護、回復期看護の定義を正しく理解し、言葉の共通認識があってこそ、スタッフ全員がより適正な看護について考えることができると強調されました。

多くの受講生が今回の講義内容を通して自分のイメージが最も変化したと感じたこととして、急性期が緊急を意味するのではなく大きな侵襲により恒常性のバランスが崩れた状態であること、急性期看護は患者だけではなくその家族にも必要であること、の2つを挙げていました。また、看護とは身体だけではなく心や環境も考慮に入れることだと再認識していました。



健康レベルと看護	
急性期看護 <sup>1)2)</sup>	何らかの原因で健康レベルが著しく低下し、生命の危機状態にあり、高度かつ集中的な医療を必要とする患者に対する看護全体を包含する。 疾病経過で示す「急性期」にある患者の看護だけでなく、慢性期疾患の急性増悪など一般に慢性長期的な経過をたどるとされる患者の急変と、事故などによる外傷、窒息も含む。その範囲は、周手術期のみならず、ICU(intensive care unit)、CCU(coronary care unit)、救命救急センターなど集中的治療を要する患者に対する看護までを含む。
クリティカルケア看護 [クリティカルケア看護学]	あらゆる治療・療養の場、あらゆる病気・病態にある人々に生じた、急激な生命の危機状態に対して、専門性の高い看護ケアを提供することで、生命と生活の質(QOL)の向上を目指す。 [出典]井上智子(2005)『独立記念公演—看護からの視線へ—』日本クリティカルケア看護学会誌,11(1),15-19
救急看護 <sup>1)</sup>	緊急に医療処置や治療を必要とする人々に対して行われる医療を受ける人々への看護。このような人々はさまざまな苦痛症状をかかえ、生命の危機に瀕する不安・恐怖に直面しているため、他の医療職と共働して救命処置を行い、心身の回復を促す看護
周手術期看護 <sup>1)</sup>	手術の実施が決定された時から、手術が終了し退院し外来通院にいたる一連の期間をさす。周手術期には、手術前期、手術期、手術後期の時期があり、この期間に行われる看護
回復期看護 <sup>1)</sup> (リハビリテーション看護)	障害または慢性疾患をもつ人が健康の回復、維持、増進によって最適な健康状態に向かうよう支援すること

【出典】1)林眞子、鈴木久美、西井裕子、熊田由紀(2011)『成人看護学 成人看護学概論』南立堂、東京  
2)井上智子(2005)『独立記念公演—看護からの視線へ—』日本クリティカルケア看護学会誌,11(1),15-19

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（100%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（98%）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（100%）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（94%）、「映像はよく見えた」（92%）という結果が出

ました。受講生からは「看護師にはコミュニケーションや心のケアをすることなどがとても大切だということが分かった」といった感想が寄せられました。